

Vol.004 未知なる歴史の宝庫：台湾・淡水が秘める世界遺産級の魅力と観光戦略

国際情勢の狭間で輝く、台湾の歴史遺産

世界遺産リストにその名を連ねる国々は、その豊かな歴史や自然を世界に誇り、多くの観光客を惹きつけています。しかし、多様な文化と歴史を育んできた台湾には、現在、ユネスコの世界遺産が一件も登録されていません。これは、1971 年に国連における中国代表権が中華人民共和国に移ったことに伴い、台湾がユネスコに加盟できないという国際的な外交状況に起因しています。世界遺産の登録申請は、ユネスコに加盟し、世界遺産条約を批准した国のみに許されているため、その価値が世界的に認められるべき数多くの文化遺産や自然遺産が、現在も日の目を見ない状況にあります。このような状況の中、台湾政府は将来の世界遺産登録を見据え、独自の世界遺産候補地リストを作成し、これらの遺産の整備と保存に尽力しています。現在、このリストには 18 か所が選定されており、その多くが自然遺産や産業遺産である中で、文化遺産としては淡水紅毛城と周辺の歴史的建築群が際立って重要な位置を占めています。文化首都とも称される台南をはじめ、台湾各地には歴史的建造物が多数点在しているにもかかわらず、それらが対象外となっているのは、街全体に遺産が分散しているため、一括して文化遺産として登録することが難しいという判断によるものとされています。本稿では、淡水が持つ世界遺産級の文化遺産としての価値と、その潜在的な観光魅力に焦点を当て、未来を見据えた観光戦略の可能性を探ります。日本に息づくもう一つの色彩豊かな古代文明

1. 淡水：多国籍な歴史が織りなす「植民地支配の最前線」から「文化交流の拠点」へ

淡水は、台北近郊に位置する港町であり、その歴史は 17 世紀にまで遡ります。大航海時代、この地は東西の勢力が交錯する重要な戦略拠点でした。17 世紀には、まずスペインが「サント・ドミンゴ城」を築き、次いでオランダが「ゼーランディア城」（後の安平古堡）に

ネクストブレイク的に今はあまり知られていない、街や地域をご紹介しますコーナーです。観光客があまり訪れることのない魅力的な地を旅することは、旅本来の楽しみ、醍醐味を教えてください。

AUTHENTIC TRAVEL
プランナーズ EYE

次ぐ台湾北部の拠点として「サント・アントニオ要塞」を建設しました。淡水は、まさに植民地支配の最前線として、ヨーロッパ列強の覇権争いの舞台となったのです。その後、清朝時代に入ると、淡水は対外貿易港として繁栄を極めます。19 世紀には、イギリス、アメリカ、そして日本などの領事館が相次いで設置され、国際都市としての顔を持つようになりました。特に日本統治時代には、教育文化の中心地として発展し、多くの学校や文化施設が建設されました。このような多層的な歴史的背景を持つ淡水には、それぞれの時代の建築物が今もなお現存しています。

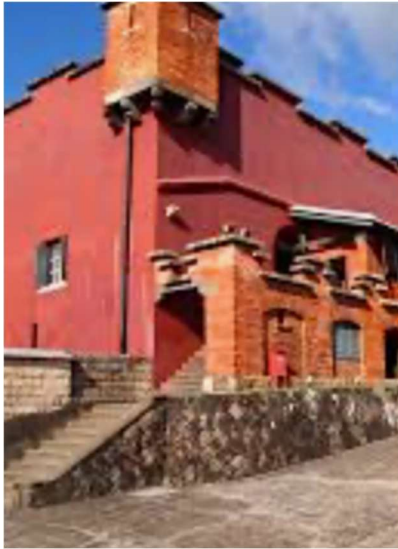


台南神学院の長老教会

紅毛城（旧サント・アントニオ要塞）

17 世紀にスペインによって建設され、後にオランダが引き継いだこの城塞は、淡水の歴史的シンボルとしてその威厳を保っています。赤レンガ造りの重厚な建物は、当時の要塞としての機能と、その後の領事館とし

ての役割を物語っています。



紅毛城

宣教師住宅と台湾最古の教会

西洋の宣教師が数多く滞在したことから、彼らの住居や台湾で最も古いとされる教会も残されており、当時のキリスト教布教の歴史と、西洋文化が台湾にもたらされた軌跡を辿ることができます。

日本統治時代の古民家

日本統治時代に建てられた古民家や公共建築物も現存しており、和洋折衷の独特な建築様式は、日本の統治下における台湾の発展と、異文化が融合した街並みを今に伝えています。これらの建築群は、淡水が経てきた波乱に満ちた歴史、そして異なる文化が融合し、新たな価値を創造してきた軌跡を雄弁に物語っています。古い港町の風情が残る老街（ラオジェ）の散策は、ノスタルジックな雰囲気を楽しみながら、淡水の多文化的な魅力を肌で感じる最高の機会となるでしょう。

2. 世界遺産級の潜在力と現在の魅力：オーバーツーリズムからの解放

淡水の持つ歴史的・文化的価値は、間違いなく世界遺産に認定されるに値するものです。台北からもアクセスが容易であることから、もし世界遺産に認定されれば、国内外から年間数百万人の観光客が訪れる、台湾を代表する一大観光地となることは想像に難くありません。その知名度と集客力は飛躍的に向上し、地域

経済に多大な恩恵をもたらすでしょう。しかし、現在の淡水は、世界遺産として国際的な認知を得ていないからこそ享受できる、特有の魅力も持ち合わせています。それは、いわゆる「オーバーツーリズムとは無縁の旅の楽しさ」です。世界遺産に登録された観光地では、しばしば過度な混雑、環境負荷の増大、地域住民の生活への影響といった問題が指摘されます。しかし淡水では、そうした懸念が少なく、訪問者はゆったりとした時間の中で、本来の歴史や文化を深く味わうことができます。地元の人々の暮らしに触れ、観光客に媚びない本来の街の姿を楽しむことができるのです。古い石畳の道を歩き、趣のあるカフェで一休みし、夕暮れ時には「淡水八景」の一つである美しい夕日を眺める。こうした穏やかな体験は、画一化された観光地では味わえない、真の贅沢と言えるでしょう。淡水は、世界遺産という「ブランド」に頼らずとも、その本質的な魅力で旅行者を惹きつける力を持っています。しかし、その潜在能力を最大限に引き出すためには、将来的な世界遺産登録を見据えた戦略的な観光プロモーションと、持続可能な観光開発が求められます。



淡水紅樓

3. 将来を見据えた観光戦略：隠れた宝石を磨くために

淡水の持つ世界遺産級の潜在力を開花させ、持続可能な観光地として発展させるためには、以下の戦略が考えられます。

- ① 多言語対応の歴史ガイドと情報コンテンツの充実: 紅毛城をはじめとする歴史的建築群の背景にある物語を、多言語で詳細に解説するガイドツアーや、VR/AR 技術を用いた没入型コンテンツを導入し、訪問者の理解を深める。
- ② 国際的プロモーションの強化: 世界遺産に匹敵する歴史的価値を持つことを、国際的な歴史・文化メディアや旅行専門誌、SNS などを通じて積極的に発信する。特に、日本の植民地時代との関連性や、西洋文化との融合といったテーマは、国際的な関心を集める可能性が高いです。
- ③ 地域連携による周遊観光の促進: 淡水と台北市内や他の近隣地域（例えば、陽明山や北海岸景勝地など）を組み合わせた周遊ルートを提案し、滞在時間を延ばすことで、地域全体への経済効果を波及させる。
- ④ 文化体験プログラムの充実: 老街での伝統工芸体験、地元料理教室、歴史建築物を利用したイベント開催など、単なる観光に留まらない、より深い文化体験を提供することで、リピーターの誘致を図る。



淡水紅樓

淡水が示す、台湾観光の未来

淡水は、国際的な外交状況によって世界遺産に登録されていないものの、その歴史的・文化的価値は世界遺産に匹敵する、あるいはそれ以上と言えほどの豊かさを秘めています。多国籍な歴史が織りなす建築群と、

穏やかな港町の風情は、訪問者に深い感動と発見をもたらすでしょう。現在の「オーバーツーリズムとは無縁」な環境を維持しつつ、戦略的なプロモーションと持続可能な観光開発を進めることで、淡水は「知る人ぞ知る」隠れた宝石から、台湾を代表する国際的な文化観光拠点へと成長する可能性を秘めています。この歴史が息づく街を訪れることは、台湾の奥深さと多様性を知る、かけがえのない旅となるはずです。淡水が世界遺産のリストに名を連ねる日が来ることを願いつつ、まずはその現在の魅力を、多くの旅人に体験していただくことを推奨します。